山口学芸研究 第12号 2021年 pp.99～112

わらべうたに対する保育者の意識に関する一考察

～研修会参加者に対して実施したアンケート分析～

坂本　久美子

A Consideration on Early Childhood Educators' Awareness of Traditional Japanese Song for Children: An Analysis of Questionnaire Given to Workshop Participants

Kumiko　SAKAMOTO

１．はじめに

わらべうたは、本来子どもたちが遊びと共に日常的に歌ってきたものであり、また、大人が子どもをあやしたり寝かしつけたりするときに自然と口ずさんできた歌であった。核家族化が進み、多世代家族によるわらべうたの継承が困難な今日では、教育・保育の現場でこれらが受け継がれる重要性は一層高まっている。幼稚園教育要領等では、わらべうたをあそびうたとしてだけではなく、伝統的に受け継がれてきた日本の文化財として位置づけられている。本岡（2018）は、わらべうたを歌いかけられた乳児自身にはその記憶をとどめておくことは不可能であり、大人が乳児に歌いかける姿を別の大人や少し大きい子どもが見て、一緒に遊ぶことによって伝承されてきたとしている。それが今日では、保育現場で保育者同士がお互いにわらべうたを実践している様子を見てまねることで受け継がれ、園文化として育まれることがわらべうたの継承に大きな影響をもたらすとしている[1]。保育現場では、わらべうたの伝承において、人的環境である保育者の果たす役割は大きい。

平成28年に閣議決定された「ニッポン一億総活躍プラン」において、保育士の処遇改善を目指し、キャリアパスの明確化とそのための体系やシステムの構築について検討がなされた。その結果、平成29年には、厚生労働省により、保育現場におけるリーダー的職員等に対する研修内容や、その実施方法について「保育士等キャリアアップ研修ガイドライン」が定められた。①乳児保育②幼児教育③障碍児保育④食育・アレルギー対応⑤保健衛生・安全対策⑥保護者支援・子育て支援の各分野でそれぞれ15時間程度を目安に、基本的研修が行われる。このような状況を受けて、乳児や幼児に対する保育内容の一つとして、わらべうたも研修会で取り上げられることが多い。また、保育現場だけでなく子育て支援や、小学校における音楽科教育にもわらべ歌が取り入れられ、音楽を伴うスキンシップや集団遊びが子どもの育ちに重要なことや、わらべうたの音楽的特徴が音楽力の基礎になる等、その価値が見直されている。

わらべうたについては、幼児教育におけるわらべうたの意義やその教育的効果、保育者養成においてわらべうたを取り入れる意義等多くの研究がなされているが、現場の保育者がわらべうたを保育に取り入れる際に、どのような課題を抱えているのかを研究されたものは少ない。

本研究では、わらべうたの研修会に参加した保育士のアンケートから、わらべうたの取り組みの現状を知り、わらべうたに対する意識からその課題を分析し、今後の現場に対する支援の仕方

や、保育者養成におけるわらべうたの取り入れる際の課題を探ることを目的とする。

２．研究方法

筆者は令和元年度に、公立保育士を対象としたわらべうた研修会の講師を務めた。主催者の話では、現在保育現場では、経験豊富な保育士から実践を通して保育を学ぶ機会や、自分の保育の振り返りの機会が十分とは言えず、わらべうたについてもその継承が困難になっていることに危機感を感じ、研修会を計画したとのことであった。2 回の研修会参加者へ、それぞれアンケートを行った。アンケートは無記名で行い個人が特定されることがないよう配慮した。

1）アンケート項目

(1) 第 1 回研修会（アンケート①）

1. 年齢
   a . 20 代　b. 30 代　c. 40 代　d. 50 代以上
2. 歌うことが好きか。
   a. 好きである　b. あまり好きではない　c. どちらともいえない
3. 保育にわらべうたを取り入れているか。
   a. 積極的に取り入れている　b. 取り入れている　c. やや取り入れている
   d. 取り入れていない　e. その他（　　）
4. 3. で a ～ c と回答した場合、自身がわらべうたを歌い遊ぶことが楽しいか。
   a. 楽しい　b. あまり楽しくない　c. どちらともいえない
   d. その他（　　）
5. 3. で a ～ c と回答した場合、子ども達はわらべうた遊びを楽しんでいたか。
   a. 楽しんでいる　b. あまり楽しんでいない　c. どちらともいえない
   d. その他（　　）
6. わらべうたを知る（習得する）きっかけは何であったか？（複数回答可）
   a. 職場（同僚や先輩保育士）　b. 楽譜　c. インターネットの動画サイト
   d. 地域の人や行事　e. 研修等　f. 小さい頃遊んだ経験　g. 親族
   h. その他（　　）
7. どのようなわらべうたを保育に取り入れているか。（曲名の記述）
8. わらべうたを保育に取り入れる際に、悩んでいること。（自由記述）

(2) 第 2 回研修会（アンケート②）

1. 年齢
   a. 20 代　b. 30 代　c. 40 代　d. 50 代以上
2. 保育士資格を取得する際、わらべ歌を学んだか？
   a. 養成校の音楽系科目として　b. 養成校の音楽系以外の科目の一部として
   c. 個人的に講座等で　d. ほとんど触れたことがなかった　e. その他（　　）
3. 保育にわらべうたを取り入れる意義を感じているか？
   a. 感じている　b. やや感じている　c. あまり感じていない
   d. よくわからない　e. その他（　　）
4. 3. で a または b と回答した方で、意義として最も感じている項目はどれか。
   a. リズムや音程等、音楽的な力が自然に身に着く
   b. 遊びながら様々な動きを経験し、身体機能の発達を促す
   c. 見たり聴いたり触れたりなど、感覚器官の発達を促す
   d. 歌うことにより、言葉の発達を促す

e. 集団で遊ぶことにより、社会性等の発達を促す
f. 伝承されてきた歌や遊びを、継承する
g. その他（　　）

３．アンケートからの考察

各回の参加者（1 回目 40 名、2 回目 69 名）全員からアンケートを回収した。ただし、第 2 回研修会の参加者 69 名のうち、41 名が 1 回目の研修には参加していなかったため、41 名については第 1 回目のアンケートも合わせて行った。したがって、アンケート①は 82 名、アンケート②は 69 名の回答を得た。各項目の集計結果から考察する。

1）アンケート①

①―1　年齢

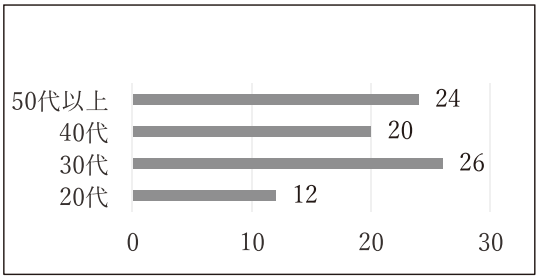

図１　参加者の年齢構成

アンケート①の回答実数は、82 名であった。年齢の内訳は 20 代が 12 名とやや少なく、30 代は 26 名、40 代 20 名、50 代以上 24 名であった。

①―2　歌うことが好きか

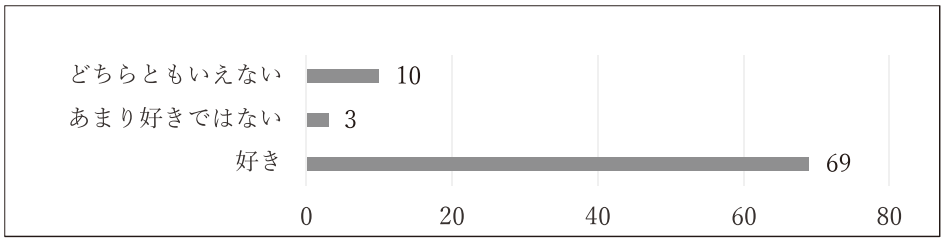

図２　歌うことの嗜好性

わらべうたのみならず歌う活動は、子どもの心身にわたる発達に関係していることから、保育に欠かせない活動であり、歌うことに対しての嗜好を尋ねた。あまり好きではない、どちらとも言えないと回答した人が 13 名（16 %）いたが、全体の 84 %は歌うことには好感を持っていた。

①―3　日頃の保育にわらべうたを取り入れているか

取り入れていないと回答した人は 0 %であった。その他 3 名（4 %）はいずれも 50 代以上であり、その内 2 名は「現場を離れている」「担任だったころは取り入れていた」と回答している。積極的に取り入れている 14 名（17 %）、取り入れている 46 名（56 %）と、やや取り入れている 19 名（23 %）を合わせると、保育にわらべうたを取り入れているのは 79 名（96 %）と非常に高い結果であった。

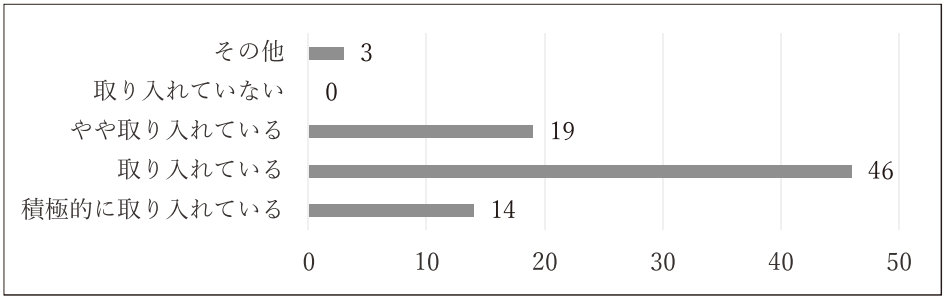

図３ わらべうたの保育への取り入れ

①―4　保育者自身がわらべ歌を楽しいと感じているか

74 名（90 %）の保育士がわらべうたを歌い遊ぶことが楽しいと回答した。設問（2)「歌うことが好きか」との関係を見てみると、どちらも好きである場合が最も多いが、歌うことに関してはどちらとも言えないが、わらべうたは好きであるとの回答者が 9 名（11 %)、歌うことはあまり好きではないと回答した 3 名は、全員がわらべうたは楽しいと回答している。遊びと一体化しているわらべうたでは、歌に対する苦手意識をわらべうたの遊びの楽しさが補っていると思われる。

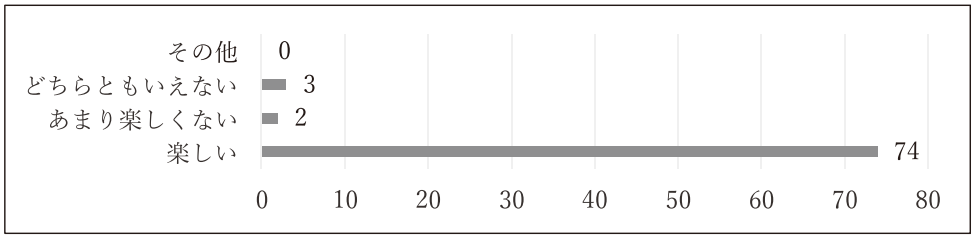

図４　わらべうたに対する保育者の感じ方

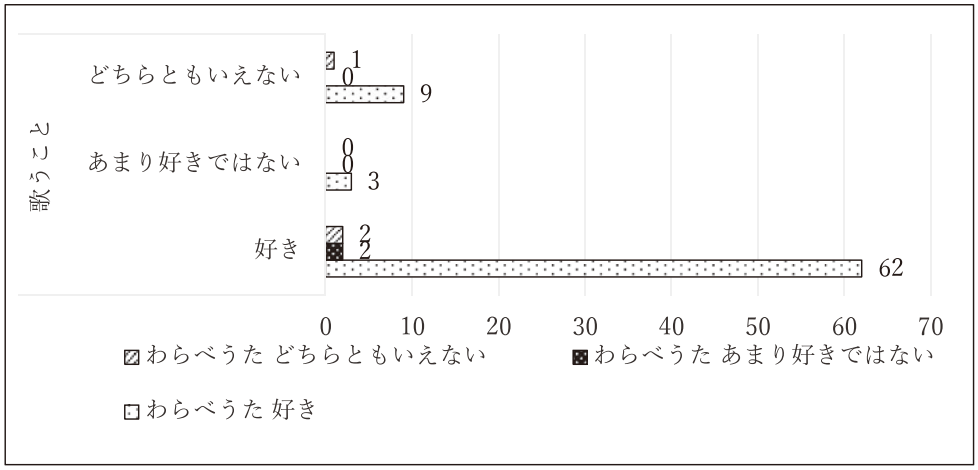

図５　歌の嗜好性との関連

①―5　子どもたちはわらべうたを 楽しいと感じていると思うか

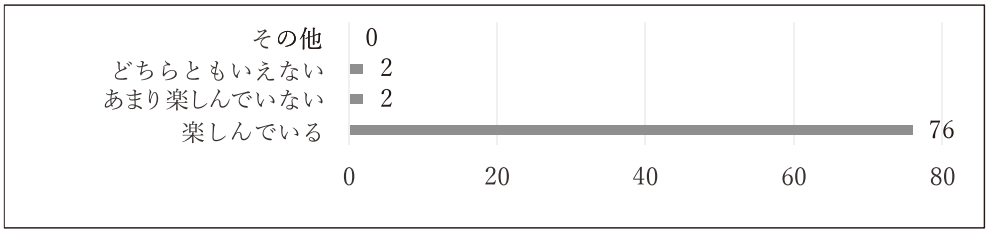

図６　わらべうたに対する子どもの感じ方

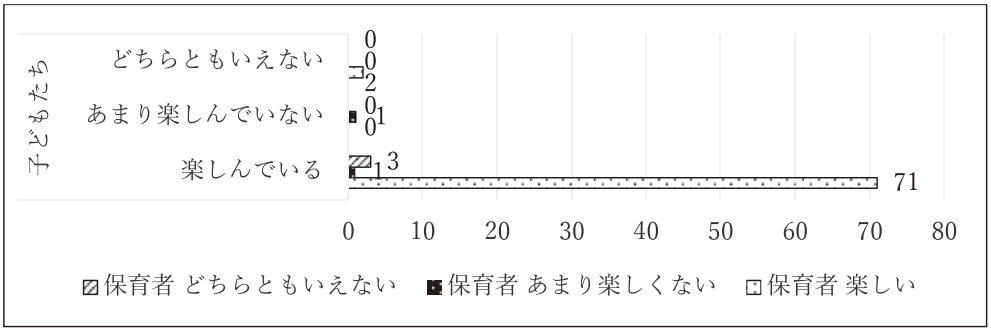

図７　保育者の感じ方との関連性

76 名（93 %）の保育者が､子どもたちはわらべうたを楽しんでいると感じている。設問（4)「保育者自身がわらべうたを楽しいと感じているか」との関係を見ると、保育者自身がわらべうたを楽しむことが、子どもの楽しさにもつながっていると考えられる。

①―6　わらべうたを知る（習得する）きっかけは何であったか？（複数回答可）

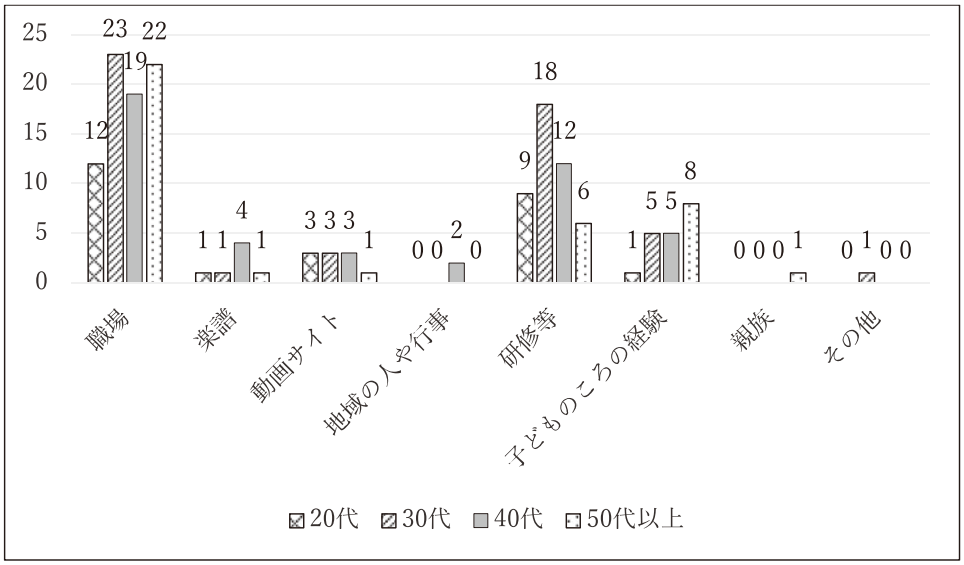

図８　わらべうたを知るきっかけ

わらべうたを知るきっかけとなったのは、いずれの年代でも職場の同僚や先輩保育士からが最も高い割合であった。動画サイトについては、大学でも知らない曲を歌ったり演奏したりする際には、まず動画サイトで視聴し、音楽の全体像をつかむ学生が増えていることから、項目に加えた。読譜は経験が必要であり、動画サイトの視聴が容易にできる現在、動画サイトによってわら

べうたを知る割合も高いのではないかと予想したが、12％（10名）に留まった。年代別にみると20代3名（25％）、30代3名（12％）、40代3名（15％）、50代以上1名（4％）であり、やはり若い世代のポイントが高い。研修等は全体で45名が挙げており、2番目に多い。年代別では20代9名（75％）、30代18名（69％）、40代12名（60％）、50代以上6名（25％）と、これも若い世代ほどポイントが高い傾向がある。逆に、子どもの頃の経験では、20代1名（1％未満）、30代5名（19％）、40代5名（25％）、50代以上8名（33％）と、高い年代ほどポイントが高く、研修会等で知る以前にすでにわらべうたに親しんでいたことがうかがえる。その他では1名（30代）が「娘や息子が歌っていたから」と記述していた。大人から子どもへ、または子ども同士で受け継がれてきた従来のわらべうたの伝承が、子どもを通して大人が知ることもありうることを示している。回答者は30代であり、その子どもたちは幼児～学童期であろう。保育や教育の場で覚えたわらべうたを家庭に持ち帰ったのであれば、保育・教育の現場の取り組みはわらべうたの伝承にとって有意義なものといえよう。

①―7　どのようなわらべうたを取り入れているか

表1は、回答があった54曲を、実践者の多い順に並べたものである。構成音とは、その歌がいくつの音からできているかを示している。日本語は「橋」と「箸」のように、上下2音を基本とした高低アクセントが基本である。表の構成音の欄にある「唱え」とは、この日本語のアクセントを基本にした、音程のない歌いかけのことである。話すときよりも言葉の抑揚を大きく、IDS[i]を意識した優しい歌いかけが、子どもの様々な感覚器官を刺激し、発達を促すと考えられる。54曲中20曲が唱え歌であった。音程がある場合、日本語の歌は一音に一シラブルであるため、わらべうたは核音[ii]をもとに日本語のアクセントの基本である2音から徐々に音を増やし、旋律を形成していく。3音でも、核音ラを中心に上下のソとシを加えた3音（表では隣接3音と表記）と、核音ミとラに、ソを加えたテトラコルド[iii]のミソラ（民謡音階）[iv]による3音がある。民謡音階のミとソは短3度の隔たりがあり、歌う技能としては上下の長二度音程より音程調整が必要である。したがって、唱えや少ない構成音のほうが歌いやすいのではないかと考えられるが、表からは音程のない唱え唄から5音までのわらべうたがまんべんなく取り入れられている。音楽面からは、顕著な傾向はみられなかった。遊びのバリエーションや、遊ぶ際の場面設定に応じた題材のわらべうたを取り入れているためではないかと思われる。

---

[i] Infant Directed Speech：ほぼすべての言語圏・文化圏で見られる対乳児発話の特徴。
声が高めになり、抑揚が大きく、応答ある繰り返しがみられること。

[ii] わらべうたの開始音・終始音であり、旋律の中心的音のこと

[iii] 上下の核音によって形作られる4度の枠

[iv] 上の核音から長2度下の音を持つテトラコルド

表１保育に取り入れているわらべうた

人数	曲名	構成音
18	さるのこしかけ	隣接３音
15	なべなべそこぬけ	隣接３音
13	ジージーバー	唱え
11	うえからしたから	２音
11	にぎりぱっちり	３音
10	どどっこやがいん	唱え
10	だるまさんだるまさん	３音
10	くまさんくまさん	隣接３音
9	うらのうらの	唱え
9	うまはとしとし	５音
8	ぼうずぼうず	唱え
8	なかなかほい	唱え
8	一本橋	３音
7	おふね（は）がぎっちらこ	唱え
7	かれっこやいて	４音
6	かごめかごめ	４音
5	こどもかぜのこ	唱え
5	からすかずのこ	唱え
5	どんどんばし	２音
4	ちょちちょち	唱え
4	とうきょうと	唱え
4	さよならあんころもち	２音
4	はないちもんめ	２音
4	ちゃつぼ	３音
4	おてぶしてぶし	隣接３音
4	あぶくたった	３音
4	こっちのたんぽ	３音
4	いちわのからす	４音
4	はちはち	４音

人数	曲名	構成音
3	このこどこのこ	２音
3	ずくぼんじょ	３音
3	ぶーぶーぶー	隣接３音
3	おちゃをのみに	隣接３音
3	げんこつ山のたぬきさん	４音
2	ここはとうちゃん	唱え
2	あんたがたどこさ	４音
2	ことしのぼたん	５音
2	とうりゃんせ	６音
1	おさらにたまご	唱え
1	どっちんかっちん	唱え
1	めんめんすーすー	唱え
1	ちゅっちゅっこっことまれ	唱え
1	いないいないばあ	唱え
1	おやゆびねむれ	唱え
1	おしくらまんじゅう	唱え
1	ちびすけどっこい	唱え
1	大根漬け	唱え
1	上がり目下がり目	２音
1	数え歌	３音
1	おてらのおしょうさん	３音
1	こんこんちき	３音
1	もどろもどろ	隣接３音
1	いなかのおじさん	３音
1	ずいずいずっころばし	５音

言葉の面では、「なべなべ」「ジージーバー」「だるまさんだるまさん」「くまさんくまさん」「ぼうずぼうず」など上位に見られる歌は、いずれも冒頭の歌詞が繰り返されていることがわかる。若井（2009）は、わらべうたの特徴の一つに、幼児言語の特色である言葉の繰り返しを挙げ、歌い初めに繰り返すことで意味を理解しやすく、音律が整い身体の動きに調和すると述べている[2]。

このように言葉と身体の動きが調和され覚えやすいことも、多くの保育者が実践している要因ではないかと考える。「さるのこしかけ」は冒頭の歌詞の繰り返しはないが、最も多く遊ばれていた。これは子どもに身近な動物である〈さる〉が登場し、園生活で基本的な腰掛ける動作を歌っており、保育の流れの中で用いる機会をとらえて取り組みやすいのではないかと考える。実際に「活動の節目の待ち時間に」と回答した保育士も見られた。また、筆者が実習指導のため保育所を訪問した際に、年少クラスの男児が、【さるのこしかけめたかけろ】と歌いながら、筆者の横に来て座った。園生活の中で、わらべうたが動作と同期しており、わらべうたの活動が生きていると感じた。また、わらべうたは、生活の中の身近な題材を、その地域の言葉のアクセントで歌うことが基本である。6番目に挙がっている「どどっこやがいん」は「かれっこやいて」と同様

の遊びで、東北地方のわらべうたである。子どもの手を魚に見立て、魚を焼くように手を取りひっくり返し遊ぶわらべうたである。【どどっこやがいん けーしてやがいん あだまっこやがいん けーしてやがいん すりぽっこやがいん けーしてやがいん】の歌詞は、山口県ではなじみが薄い言葉のように思われる。しかし【どどっこ】【あだまっこ】【すりぽっこ】の促音や、【やがいん】の撥音、【けーして】の長音など、これらの繰り返しによって生まれるリズムや言葉の音の面白さが魅力になっているため、多く実践されているのではないだろうか。寒さで冷えた子どもの手を、火鉢の火にかざして温めながら歌ったことが遊びの始まりだといわれている。子どもを愛おしむ気持ちが歌にこめられており、地元の言葉にはない言葉の音の面白さを遊びと共に楽しみ、わらべうたを歌い継ぐことは意味あることだと考える。

回答の中には、「月によってわらべうたのテーマが決まっている」「研修で習得したものをすぐに取り入れている」など、園全体でわらべうたに取り組んだり、自分の学びを積極的に保育に取り入れたりする保育者の様子もうかがえた。一方、自由記述の曲名の中には「うまはのしのし」といったことばの思い違いも見られた。「としとし」と「のしのし」は、母音が同じであるため聞き間違えたものと思われる。研修ではタ行のｔの子音をはっきり歌うことや、馬の走る様子の遊びであることを伝えることが必要であると感じた。時代や遊び手によってわらべうたがアップデートされることは周知のことである。もし、「のしのし」とアレンジして歌うのであれば、言葉のイメージから遊び方や動きが変わり、その発想力・想像力こそがわらべうたを生き続けさせている原動力であろう。

①―8　わらべうたを保育に取り入れる際に、悩んでいること

わらべうたを取り入れる際に悩んでいることを自由記述で回答を求めた。回答のあった 31 名の内容をまとめると、3 つのカテゴリーに分類することができた。

ｉ　個人技能に関すること

自らの歌唱のむつかしさを挙げた保育者が 17 名と、半数以上であった。

わらべうたは、拍に合わせて動くため、自分で拍やテンポを設定する必要がある。現在、私たちの身の回りには速いテンポの音楽が溢れ、その音楽に合わせて身体を動かす、または思わず動くことはよくあることである。しかし、外部の音楽の支えなしに自分でテンポを決め、アカペラで歌いながら動く経験はそう多くはないと思われる。ダルクローズがテンポの定まらない学生であっても、一定のテンポで歩くのを見て、リトミック理論を生み出したように、まずは 1 拍子的な拍節感を、「歩く」という動きで体得することが重要であろう。

また、音域について、「好きな高さでうたいはじめてよいのか」との記述があった。伴奏のないわらべうたでは、歌い手が初めの音を決めなければならない。乳幼児に歌いかける場合や唱えうたでは、IDS を意識したやや高い優しい声が望ましい。一方、幼児対象では、保育者が幼児の声域を踏まえた音域で歌うことが大切である。幼児の声域については、多くの研究がなされているが、概ね年少児がイ～ロ、年中・年長児がイ～ハとなっている[3]。わらべうたの多くが、テトラコルド内の 4 度音程内の構成音であることを考慮すると、開始音はトまたはイ当たりがよいのではないかと考える。言葉については「覚えられない」との記述が多く見られた。わらべうたは遊びを伴っており、覚えて歌うことが必要である。幼児歌曲等は楽譜を見ながら歌うことが習慣化しており、また、歌詞を理解しながら覚える癖がついているとも考えられる。わらべうたには聞きなれない言葉や意味のない言葉もあり、遊びの動きと共に、言葉を音や響きとして捉える面があるのではないだろうか。わらべうたは 1 曲が短く、遊びの楽しさを伴うため、何度も繰り返し歌われる。わらべうたの生まれた経緯や言葉の意味を知ることは大切であるが、それらを踏まえた上で歌や遊びそのものを“面白がる”気持ちが重要であろう。子どもたちが、古い言葉による長いわらべうたでも歌い遊ぶ姿からは、楽しい遊びの繰り返しこそが、歌を覚えることにつな

がっていると言えるのではないだろうか。

表２　保育にわらべうたを取り入れる際の悩み

個人技能	拍	拍を意識しすぎて、子どもに伝える時、楽しめないことがある
		拍を感じてといわれるが、拍を感じるとは？感じているつもりだが‥
		拍の取り方がむつかしい
		拍があっているか
	音程 音域	音程が合ってるかしら？音程が取れない
		高い声が出ない
		好きな高さで初めてよいのか
	リズム	リズムや音程がむつかしい
		リズムが違っている時がある
	歌詞	新しいことが覚えられなくなっている
		歌詞が覚えづらい
		歌詞や音が覚えにくく自信を持ってできないことがある
		歌詞・リズムが似ているものがあり、ごちゃごちゃになってしまう。
		覚えてもリズムや歌詞をすぐに忘れてしまう・覚えられない
		途中から歌詞がわからなくなることがある
		歌詞の意味がわからない
	動き	動作に休符を入れるか入れないか
集団での遊び方 取り入れ方		集団で動きながら楽しむことが形になるまで
		集団でやる際の説明の仕方
		幼児クラスでの取り入れ方（乳児のイメージが強い）
		どのタイミングで取り入れたらよいのか…と思ううちに時間が流れている
		大きい子への集団遊びの取り入れ方
		導入
		伝え方・教え方
レパートリー バリエーション		同じ歌い方しかできていない（アレンジができない）
		一つの歌で状況や年齢によってバリエーションを変えたら楽しい
		レパートリーが少ない・すぐに歌が出てこない
		あまり種類を知らない
		年齢にあった歌をあまり知らない
		人や園によって違っている
		公立内で伝承されてきたものと研修等で教わったものとどちらをするべきか

動きについては研修会でも「歌の休符では､動きも止めるのか」との質問があった。例えば『このこ どこのこ かっちんこ』は、子どもを揺らしながら歌うわらべうたである。この場合､「かっちんこ」のあとの四分休符で動きを止めるかどうか、迷うとのことであった。フレーズの終わりには、眼差しを交わしながら気持ちを共有するため動きが止まる場合もあるが、繰り返し遊ぶ時には、言葉や音がなくても拍は続いており、動きは止めないほうがよいと筆者は考えている。また、わらべうたは２拍子系の歌が多いため、休符で止まることにより、動きがそれまでと左右逆になることが考えられる。例えば、歩いたり左右の握りこぶしを振ったりなどの場合、継続的に左右が繰り返されることで、安心して動けるのだが、休符で止まった場合動きが左右逆になることが想定され、身体を通して拍子感を身につける上で好ましくないと考える。

ⅱ　集団での遊び方や取り入れ方について

保育者自身の技能の他には、6名の保育者が「集団遊びの取り入れ方・説明の仕方や、取り入れるタイミング」について悩んでいると回答した。松井（2020）[4]や渡辺（2014）[5]の保育者養成校の学生や保育者への知っているわらべうたアンケートでは、集団遊びのわらべうたのポイントが高い。乳児期のわらべうたは記憶に残らないため当然であるが、自身が遊び、知っているわらべうたであっても、保育の現場で集団に向け指導することはむつかしいことがわかる。安藤（2017）は、ベテランの保育士でも自身のわらべうたで遊んだ経験だけでは子どもを教える保育技術に直結せず、講習会や具体的な映像の視聴により、理論と実践を通して体系性を学ぶことで、保育に取り入れる方法を習得できたと述べている[6]。また、斉木（2014）は、わらべうたを保育に導入する視点として、①活動目的、②選曲と楽譜の解釈、③導入する場、が重要なカギになると述べている[7]。特に③について、保育現場には大人が意図をもって作り上げた集団や活動内容があり、自然な形でのわらべうたの取り入れは容易でないことを述べている。設定された場でありながら子どもたちが主体的に遊べるよう、保育者が援助的立場に身を置くことが肝要としている。回答に多かった「集団遊びの取り入れ方や取り入れるタイミングがわからない」は③に最も関わると思われる。小林（2018）は、わらべうたを教材とした幼児の表現活動における直接経験の意義について、遊びにおいて直接経験は動的イメージ形成につながり、表現においては当初のイメージを深化・拡大させたと述べている[8]。このように、保育にわらべうたを取り入れる際には、保育者自身の経験や子どもたちの生活体験との関連性を見出し、日々の保育の中からそれらのきっかけを見つけることが、取り入れ方やタイミングのヒントにつながると考える。「説明の仕方がわからない」との回答については、年長者の遊びを年少者が傍らで見てまねているうちに自然に身につけ、受け継がれてきたわらべうたの伝承の形を再認識することが必要であろう。保育者がテキストを参考に、子どもたちに教える形を取らざるをえない保育現場では、わらべうたを指導する意識が強いのではないだろうか。子どもたちが遊びたいと興味関心を持ち、やってみたいと意欲を高めるためには、その遊びが楽しさと共に子どもたちの学びや成長にとって何を与えうるのかを、保育者がしっかりと見極め選曲することは重要である。しかし、実践に当たっては指導的立場ではなく、斉木の言う援助的立場で共に歌い遊ぶことが望ましいと考える。自らが遊び上手になり、子どもたちを遊びに巻き込み、性急に正確さや完成度を求めるのではなく、「徐々にできるようになる」を待つことも必要ではないだろうか。

ⅲ　レパートリーや遊びのバリエーションについて

「レパートリーが少ない」「歌がすぐに出てこない」などは、個人技能の「歌を覚えにくい」ことと連動していると考えられる。「年齢にあった歌をあまり知らない」「一つの歌で状況や年齢によってバリエーションを変えたら楽しい」「同じ歌い方しかできていない（アレンジができない）」に対しては、わらべうたの歌や遊びの特徴を、子どもの発達段階と関連付けて展開できる力をつけることが求められるだろう。「人や園によって違っている」「園内で伝承されてきたものと研修等で教わったものとどちらをするべきか」など、正解がないことに戸惑いを感じる回答も見られた。このような迷いが、わらべうたを覚えて歌うことのさまたげになっていないだろうか。永田は、わらべうたが伝播伝承の過程で、遊び方や歌い方がさまざまに変化することや、子どもの遊び文化に関わる大人はそれを十分に把握しておく必要性があると述べている[9]。言語の持つ地域性や遊ぶ子供集団の年齢等でもわらべうたは変化する。保育者自身が、歌い心地や子どもたちとの共有しやすさ、遊びや動きとの関連性と総合的に判断するのが望ましいと考える。

2）アンケート②

②―1　年齢

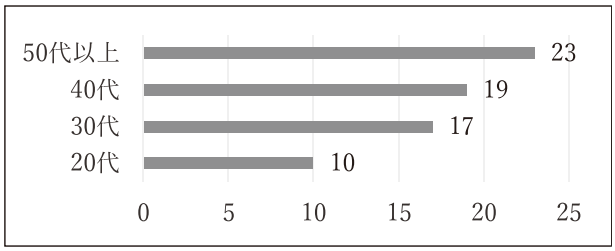

図９　年齢構成

アンケート②の回答実数は、69 名であった。年齢の内訳は 20 代が 10 名（14 %）と一番少なく、30 代 17 名（25 %）、40 代 19 名（28 %）、50 代以上 23 名（33 %）と、年齢が高いほど人数も多くなっていた。

②―2　保育士資格を取得する際に、わらべうたを学んだか

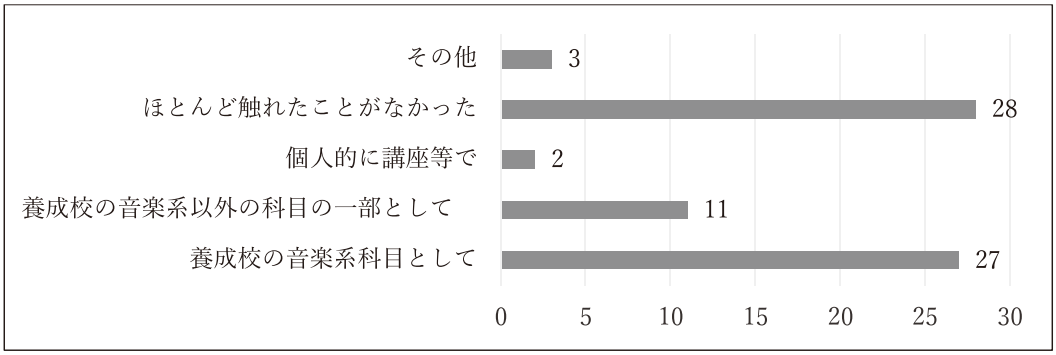

図 10　わらべうたをどこで学んだか

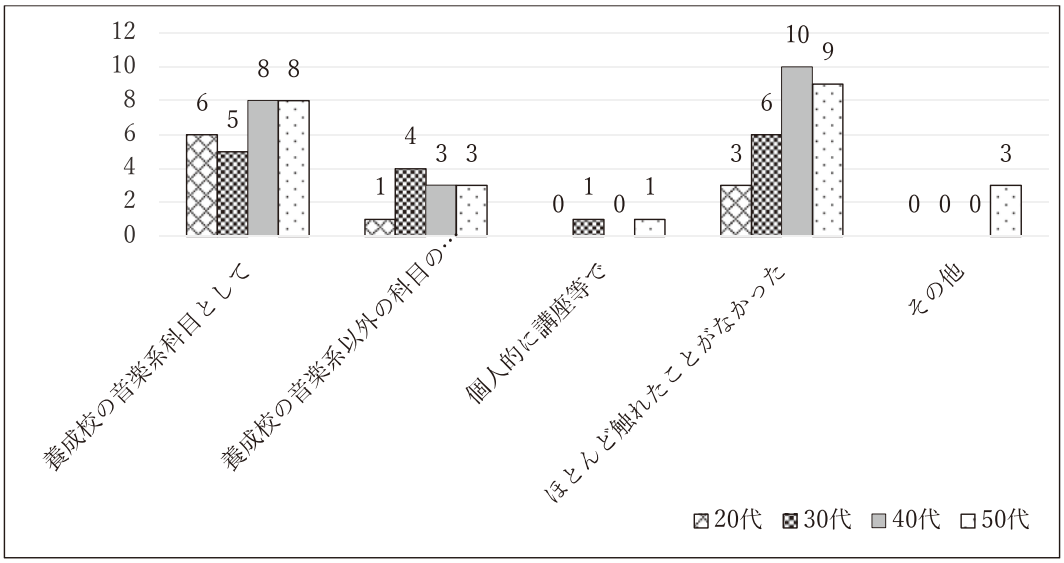

図 11　わらべうたをどこで学んだか（年代別）

参加者の 27 名（39 %）が養成校の音楽系、11 名（16 %）が養成校のそれ以外の科目でわらべうたを学んでいた。わらべうたは、歌を歌いながら身体を動かす遊びが基本であり、生活に根差した身近な物や事象が題材であることから、幼稚園教育要領等の五領域に横断的に関わる保育教材といえる。音楽系以外の科目で学んだのは、表現以外の領域に関する科目ではないかと推察する。一方､ほとんど触れたことがなかったという回答も 28 名（41 %）あった。年代別にみると、

40 代、50 代の割合が高い。50 代以上の保育者のその他の項に、「わらべうたが盛んになったときに採用されたので、職場の研修で指導を受けた」との記述があった。「わらべうたが盛んになったとき」とは、コダーイシステムを学んだ音楽教育家の羽仁協子が、1968 年にコダーイ芸術研究所を設立し、乳幼児を対象としたわらべうたの保育実践を展開していた 70 ～ 80 年代と思われる。子どもの保育・育成に関わる保育者に、一人一人の子どもの人格を尊重し、円満な人格形成を援助していく保育理念と理論を、具体的なわらべうたの実践として提示する活動であった。このような社会現象が、保育者養成校の指導内容に徐々に反映されたことで、2 ～ 30 代の回答に見られたように、養成校での科目として学んだ割合が増えているのではないかと推察する。

②―3　保育にわらべうたを取り入れる意義を感じているか

保育にわらべうたを取り入れる意義について、参加者全員が「感じている」「やや感じている」であった。

②―4　最も意義を感じている要素について（複数回答可）

永田は、わらべうた遊びが子どもの身体的発達、言語的発達、社会性の発達、心の発達を育むなど、人間教育の出発点で欠かすことのできない重要なものと位置付けている[10]。安藤（2017）もわらべうたについて、「音楽の感性、協働性、創造性などの多角的な側面から子どもの発達における人格形成に寄与する全人的な教育的意義を持つ」と述べている[11]。また、小島は、遊びの中で経験しているわらべうたの文化財としての意味を見出していくような教育を行うことが、表現者としての子どもを育てることにつながるとしている[12]。これらのことから、次の 6 つの項目を選択肢として挙げた。

a．リズムや音程等、音楽的な力が自然に身に着く
b．遊びながら様々な動きを経験し、身体機能の発達を促す
c．見たり聴いたり触れたりなど、感覚器官の発達を促す
d．歌うことにより、言葉の発達を促す
e．集団で遊ぶことにより、社会性等の発達を促す
f．伝承されてきた歌や遊びを、継承する
g．その他（　　）

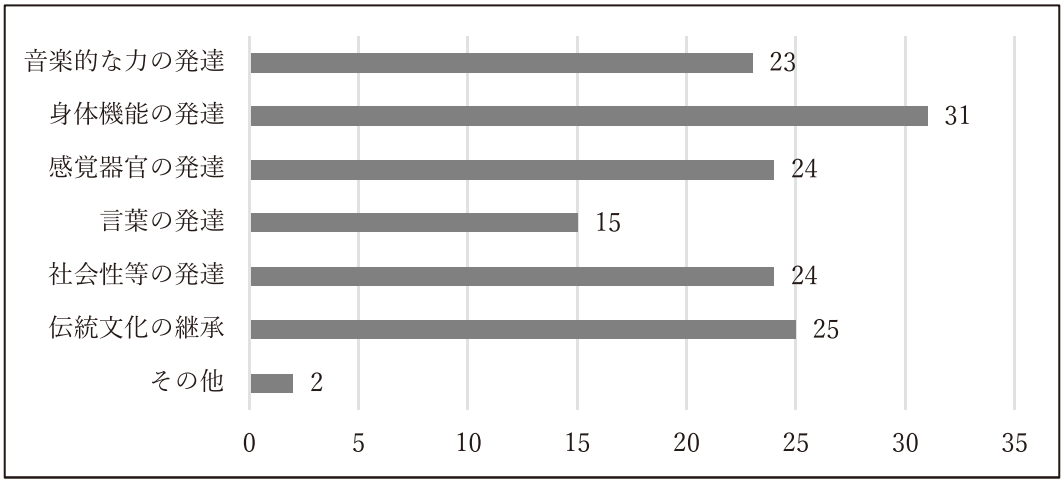

図 12　わらべうたの意義

「遊びながら様々な動きを経験し、身体機能の発達を促す」が 31 名と最も多く、「歌うことに

より、言葉の発達を促す」が15名とやや少なかったが、その他のどの項目も満遍なく意義があるものとして捉えられている。

言語発達の著しい3歳未満児との1対1でのわらべうた遊びでは、アイコンタクトや表情によるコミュニケーション、口元を見せながらの歌唱が欠かせない。子どもが、歌う保育者の口元をじっと見ることがあるが、聴覚と視覚を協同的に働かせ、それらを模倣しようとしていることを意識すべきであろう。また、わらべうたを歌う場合、声楽や演劇といった広い空間に響く豊かな声というよりは、心地よい声量で日本語の美しい発音を目指すべきであろう。日本語の発音について、ソプラノ歌手で日本語歌唱の研究家でもある藍川は、外国語に適した発声法や歌唱法を、日本語の歌にそのまま流用することに警鐘を鳴らしている[13]。例えば、藍川は「ほとんどの日本人は「ん」をMで発音するのか、Nで発音するのかという問題に無関心です」と述べている[14]。日本語の「ん」の発音は、「ん」の次の文字の発音によって、唇を閉じる場合（m）と閉じない場合（n）がある。「ん」の次が、唇の破裂によって発音するp、b、mの子音であれば、その発音を準備するために「ん」はmで発音する。「だるまさん だるまさん」はnであり、「うまはとしとし」の【のりてさんもつよい】はmである。このようにわらべうたを通して、日頃は無意識に発音している日本語の発音について再認識することで、子どもにとっての発音モデルになっているのだという自覚を促したいと考える。

「その他」の項では、2名が「大人または子ども同士の触れ合いの場となる」「やさしさが伝わるスキンシップの大切さ」を記述している。特に乳幼児にとって、大人との触れ合いやスキンシップは、安心感や信頼感につながり、情緒を安定させる大きな要因である。今回のアンケートでは、遊ばせ歌や1対1の関わり遊び、集団遊び等をすべて含めており、遊びの形態によっての意義が異なっていることへの配慮が足りず、選択項目が網羅しきれていなかったことが反省点である。

4．おわりに

今回の研修アンケートを通して、保育者がわらべうたに取り組む際の課題がいくつか明らかになった。

今回、歌うことが好きと言い切れない保育者が13名見られたが、このうち12名はわらべうたが楽しいと回答している。このことから、遊びを伴うわらべうたは、歌への苦手意識を感じることなく保育に音楽を取り入れることができる手段だと考えられる。保育者養成の授業においても、歌唱活動の興味付けや歌唱技能の習得教材としてわらべうたを積極的に用いたい。

また、わらべうたを知るきっかけとしては、「職場の先輩や同僚から」が最も多く、「研修会で」が二番目であった。「楽譜」や「動画サイト」等の媒体ではなく、人を介して知ることが多かった。遊び（動き）を伴ったわらべうたは、リズムや音程といった歌唱表現と、身体の動きを複合的に表現するものであり、言語的説明がむつかしく、受け取る際の想像力も必要である。やはり、人と共に活動することにより習得することが効果的であることがわかった。

わらべうたを保育に取り入れる際の悩みでは、①個人の技能②集団での遊び方や取り入れ方③レパートリーやバリエーションの三つの分野に分けられた。①については、できないことを理論的に考え理解しようとする以上に、繰り返し歌い遊ぶ中で会得していくというわらべうたの本質に立ち返ることを勧めたい。アンケート①―6の習得のきっかけとして人を介して習得していくことが最も多かった結果からも、わらべうた遊びの実践を、他者と共有することの大切さがうかがえる。②については、保育者自身の生活や子どもたちの生活経験とわらべ歌の関連性を見出す視点を持つことや、言語的指導や援助だけでなく、保育者自身が遊びを体現し、子どもたちを遊びに巻き込む行動こそが必要である。③については、正解を求めすぎず、言語の地域性や子どもたちの発達段階による、遊びや歌の変容を柔軟に受け止め、同園内の保育者が共通理解したわら

べうたの遊び方を提供することが求められる。

わらべうたを保育に取り入れる意義については、多くが複数の意義を挙げていることから、五領域に広く関わる活動内容であると認識されていることが確認できた。中でも、身体機能の発達についての回答が最も多く、わらべうたが身体運動を伴った遊びであるとの認識が強いと感じられた。一方、言葉の発達についての回答がやや少なかったことから、特に遊ばせ歌の乳児期には、保育者が子どもにとっての発声・発音モデルになっているという自覚を促したいと考える。これらの課題を、今後の研修や保育者養成に生かしたい。

謝辞

本研究のアンケートにご協力いただきました、保育士の方々に心より感謝申し上げます。

参考・引用文献

1 本岡美保子「わらべうたと乳児の社会性の発達との関連について：乳児保育への実践的な示唆」『広島大学大学院教育学研究科紀要 第三部、教育人間科学関連領域（67）』(2018) p 142
2 若井勲夫「童謡・わらべ歌新釈（中）」『京都産業大学論集人文科学系』(40)(2009) p254
3 武田道子・加藤明代「乳・幼児の歌唱能力の発達に関する一考察～声域調査の分析を通して～」『静岡大学教育学部研究報告（教科教育学編』 第 35 号 p 247 ～ 258（2004）
4 松井いずみ「わらべうたを使用した音楽表現活動の提案―保育を学ぶ学生らと共に―」『明星大学教職センター年報 第 3 号』(2020)
5 渡辺優子「保育におけるわらべうたの教育的効果～担任アンケートとわらべうた遊びの分析を通した考察」『新潟青陵学会誌 7 巻 1 号』(2014)
6 安藤 江里「伝承遊びとしてのわらべうたを再経験することの初等教員養成における有用性～幼小接続の視点から～」『教育総合研究 創刊号』(2017)
7 斉木美紀子「テキスト化されたわらべうたの保育実践における使用の視点」『田園調布学園大学紀要』第 9 号（2014）p139 ～ 152
8 小林佐知子「わらべうたを教材とした幼児の表現活動における直接経験の意義」『畿央大学紀要』(2018) p 13 ～ 27
9 永田栄一「幼稚園・保育園・お母さんのための 日本のわらべうた遊び 35」音楽之友社（1998）p8
10 同上書 p13
11 前掲論文 3 p15
12 小島律子『学校における「わらべた」教育の再創造』－理論と実践― 黎明書房（2010） p 17
13 藍川由美『子供も大人もゲーム感覚で熱中する歌唱法 藍川メソッド』カワイ出版（2007） p 49
14 同上書 p50